

# アルベルトゥス = マグヌスにおける 哲学的観照の意義

江口克彦

## はじめに

本小論の目的は、アルベルトゥス = マグヌスの『倫理学注解と諸問題 (Super Ethica commentum et quaestiones)』第十巻にみえるアルベルトゥスの哲学的観照に関する所説を検討することで、アルベルトゥスにとって、およそ何かを学び知ることとはどのような意義をもっていたのか、その一端を明らかにすることにある<sup>1)</sup>。

そこで、まずはじめに、観照 (contemplatio) 一般に関するアルベルトゥスの見解を確認した後、次に、神学的観照 (contemplatio theologica) とは区別される哲学的観照 (contemplatio philosophica) の特質に関する彼の所説を検討し、最後に、哲学的観照において学知 (scientia) の果たす役割を、アルベルトゥスはどのように評価していたのかを見てゆくことにする。

## 1 観照的幸福

「人間は自然本性的に知ることを欲する」とはアリストテレスの説くところであるが、アルベルトゥスによれば、アリストテレスのこの言葉は、人間の知への欲求を一般的な仕方でも語ったものとして理解されねばならない。人間は漠然と知ることを望んでいるのではなく、何よりもまず神的な事柄 (divina) を知ることを欲しているのである<sup>2)</sup>。なぜなら、この「知る (scire)」という知性の働きには、人間の生活全体を最高善 (summum bonum) の観照へと秩序づけようとする意志 (voluntas) の働きが先行しているからである<sup>3)</sup>。すなわち、アルベルトゥスによれば、知性認識の対象はまず善として愛好されるものであり、観照するとは、善なるものを自らのものにしようとする情動的知性 (intellectus affectivus) の働きに他ならないのである<sup>4)</sup>。

さらに、観照とは、情意と知性の純粋さという点で神的なものの働きを模倣すること (*imitatio divinae operationis in puritate affectus et intellectus*) でもある<sup>5)</sup>。アルベルトゥスは、知性的な働き (*operatio intellectualis*) を光にたとえて、次のように説明している。

光の輝きの度合いは、光がいかなるものの内に存しているかによって異なる。光の輝きは、光がより純粋なものの中に存し、混合から免れていればいるほど、より純粋な輝きを放つのである。知性的本性 (*natura intellectualis*) も同様である。第一の最も純粋なもの、すなわち神の内にあるのは、知性的な働きは最も純粋な仕方で行っているものであり、それゆえ神においては最も高貴な観照的幸福が存している。そして、神より下位の知性認識するもの、すなわち、知性体 (*intelligentia*) や人間は、知性認識の働きがより純粋になればなるほど、それだけより多く観照的幸福に与ることができるようになる<sup>6)</sup>。それゆえ、人間が自然本性的に神的な事柄を知ることが希求するのは、可能な限り神的な働きを模倣しようとするにほかならない。そして、より長い時間、そしてより完全な仕方で行うことで神的な事柄を知性認識することによって、人間の知性は神的なものにまで高められ、より知性体に接近し、より持続的で充実した幸福に与ることができるようになるのである<sup>7)</sup>。

すなわち、観照とは、人間の知性が知性体の働きを模倣することであり、人間の現世において可能な最高の幸福なのである。

観照が知性体の働きの模倣であるとするならば、それは、妨げられることのない、幸福という目的へと関係づけられた知性の働き (*operatio intellectus non impedimenta, relata ad finem felicitatis*) でなければならない。しかし、人間の知性は身体の中に存しているものであり、必ずしも持続的に観照することはできない。人間が神的なものにより近づくためには、観照を妨げるものから可能な限り遠ざけられていなければならないのである。アルベルトゥスによれば、そのような観照を妨げるものは二つの面から考えることができる。すなわち、基体 (*subjectum*) に関して観照を妨げるものと、習態 (*habitus*) に関して観照を妨げるものである<sup>8)</sup>。

観照の基体に関する妨害とは、情念 (*passio*) の混乱によって知性の働きが妨害されることである。このような情念の混乱から人間の知性を解放するのが諸々の道徳的卓越性 (*virtus moralis*) なのである。それゆえ、道徳的卓越性は準備態勢の秩序 (*ordo dispositionis*) において観照へと秩序づけられている、とも言われる。道徳的

卓越性は、知性が安んじてその働きをなすことができるように人間を態勢づけるのである<sup>9)</sup>。のみならず、この道徳的卓越性の働きは、現実態において観照している知性を安定させるものとして、観照する者の内に留まり続けねばならない。現世においては、観照の働きを揺るぎないものとするために道徳的卓越性がつねに必要とされるのである<sup>10)</sup>。

これに対して、習態に関する妨害は、人間の知性的本性の不完全さに起因する。完全な知性的本性を有する知性体は、神から可知的 (intelligibile) なものが直接流入してくることによって持続的に知性的な働きを行うことができる。しかし、人間はある種の比量 (collatio) によって知性認識に到達しなければならない。人間の知性は、可感的なもの (sensibile) から出発し可知的なものへと分析 (resolvere) することによって、知性的な働きを行うことができるのである。それゆえ、この分析というある種の推論 (ratiotinatio) によって、結論を引き出すのに必要な前提を確実に把握し、そのような前提からの確に、かつ速やかに、結論へと到ることが、安定した観照のために必要なのである。すなわち、妨害されることなく観照をおこなうためには、的確な推論に関わる知性的卓越性 (virtus intellectualis) が確立されていなければならないのである<sup>11)</sup>。そして、この点に、次に述べるように、神学的観照 (contemplatio theologica) とは区別される哲学的観照 (contemplatio philosophica) の独自性が存しているのである。

それでは、哲学的観照と神学的観照とはどのような点で区別されるのだろうか。

## 2 哲学的観照と神学的観照

アルベルトゥスは、『倫理学注解と諸問題』第十巻において、観照を、哲学の最高段階、最高に可知的なもの・第一原理としての神の知性認識、知恵 (sapientia) という知性的卓越性の働き、と様々な仕方で規定している。しかし、アルベルトゥスによれば、神的な事柄は、このような意味での知恵・哲学的観照によってしか把握できないというわけではない。人間の自然本性の完成としての知性認識とは別に、神顕 (theophania) という神の直接的な働きかけによっても神的な事柄は把握されうるのである<sup>12)</sup>。ディオニシオス・アレオパギテースも説くように、人間の知性は、神顕によっても、神を見ることにまで高められうるのであり、このような神顕による神の直視 (visio dei) すなわち神の神学的観照は、哲学の最高段階である知恵による神の知

性認識とは区別されねばならないのである<sup>13)</sup>。

もちろん、神学的観照も哲学的観照もともに、何らかの霊的なものを知解することによる明察 (*inspectio per intellectum aliquorum spiritualium*) であって、最高の幸福である神における安息へと秩序づけられている。そして、いずれの観照においても、それが完全なものであるならば、観照の対象への確信 (*fides*) が疑いによって妨害されることはありえないのである<sup>14)</sup>。

しかし、アルベルトゥスによれば、哲学的観照と神学的観照とは以下の点ではっきりと区別されねばならないのである。

まず、人間の知性は、知恵という知性的卓越性によって完成される限りにおいて、神の哲学的観照に関して十分な働きをなしうるのではあるが、しかしそれにもかかわらず、知恵による人間の自然本性の完成は最終的なものではない。人間の自然本性は、それに加えてさらに、神学的観照の可能性、すなわち神顕による完成の可能性を有しているのである<sup>15)</sup>。

さらに、この二つの観照は、必要とされる準備態勢 (*dispositio*)、習態 (*habitus*)、対象の意味内容に関しても異なっている。

準備態勢に関する相違についてアルベルトゥスは以下のように説明している。

この二つの観照はいずれも、それが可能となるためには、道徳的卓越性によって観照の主体が情念の混乱から遠ざけられていることを必要とする。しかし、神学的観照の場合は、さらにそれに加えて、流入的な卓越性 (*virtus infusa*) が必要とされる。すなわち、神学的観照のためには、観照の主体が信仰・希望・愛という対神的卓越性 (*virtus theologica*) によって神の観照へと態勢づけられていなければならないのである<sup>16)</sup>。

また、哲学的観照と神学的観照は必要とされる習態に関しても異なっている。神学が神から流入した光 (*lux infusa a deo*) によって観照するのに対し、哲学は獲得的に形成されたものである知恵という習態 (*habitus acquisitus sapientiae*) によって観照するのである<sup>17)</sup>。

さらに、対象の意味内容の相違については、アルベルトゥスは以下のように説明している。

神学の究極の目的は天国における神の観照 (*contemplatio dei in patria*) である。これに対して、哲学の場合も究極の目的は神の直視ではあるが、しかしそれは現世に

において何らかの程度において (aliquatenus in via) 神を見ることに留まる。神学的観照も哲学的観照もその対象は同じ一つの神なのであるが、しかし、対象を把捉する様態 (modus) は異なっているのである<sup>18)</sup>。

哲学者が神を観照する場合、観照の対象としての神は、論証によって得られたある種の結論 (quaedam conclusio demonstrativa) としての神である。これに対して、神学者は、理性と知性を超えて存在するもの (supra rationem et intellectum existens) としての神の観照をめざす。それゆえ、アルベルトゥスによれば、哲学は論証の確実性 (certitudo demonstrationis) に依拠して神を観照するのであり、これに対して、神学の観照は自体的な第一真理 (prima veritas per se) に依拠して神の観照をおこなうのである<sup>19)</sup>。

すなわち、神顕による神の直視が神の自体的 (secundum se) な把捉であるのに対して、知恵による神の認識は、他の可知的なものの知性認識と同一の認識様態 (modus cogitandi) において得られるものなのである。哲学においては、神は可感的なものからの分析・推論によって認識されるのであり、あくまで人間の自然本性としての知性の働きによる認識の範囲内で、第一原理としての神が把捉されるにとどまるのである<sup>20)</sup>。

### 3 知恵と学知

知恵とは人間の自然本性としての知性の働きの範囲内での第一原理たる神の把捉であった。しかし、哲学的観照はこのような知恵によってのみ可能となるのではない。アルベルトゥスが強調するのは、哲学的観照が完全なものとなるためには、知恵だけでは不十分であり、様々な学知 (scientia) が必要不可欠である、という点なのである。

アルベルトゥスによれば、観照すること (contemplari) と哲学すること (philosophari) はまったく同一の事柄というわけではない。

アリストテレスも説くように、哲学の喜び (delectatio) は、観照がそうであるように、驚嘆すべきもの (admirabilis) であり、純粹 (pura) であり、揺るぎなきもの (firma) である。哲学の喜びが驚嘆すべきものであるのは、人間は哲学することによって「ということ」(quia) の認識、つまり事実の認識から、「なにゆえに」(propter quid) という根拠の認識へ進んでゆくからである。たんに事実のみを認識

している者にとって、根拠の認識は、まさに驚くべきものなのである。また、揺るぎなきものであるのは、「なにゆえに」という根拠を認識することによってはじめて、事実の認識は確固とした根拠を得るからである。さらに、哲学の喜びが純粹であるのは、「なにゆえに」という根拠の認識は可知的なものの認識であるからにほかならない<sup>21)</sup>。

しかしながら、アルベルトゥスによれば、哲学することは観照することよりも、より共通な働きとして理解されねばならない。

なるほど、驚いている人もまた、哲学している人でありうる。驚きは哲学の始まりだからである。しかし、たんに驚いているだけの人は、「ということ」という事実を考察するのに必要な習態も有していなければ、まして「なにゆえに」という根拠を考察するのに必要な習態も有していない。哲学するとは「なにゆえに」という根拠の認識をめざしての知性の探求の歩みなのである。そして、そのような習態を完全な仕方と有する人のみが、観照することができるのである<sup>22)</sup>。

「なにゆえに」という根拠の認識は原理 (principia) の認識であり、諸々の原理の認識は最終的には、第一原理の認識 (prima principia) に還元される。それゆえ、第一原理の認識において、根拠の認識は完全なものとなる。そして、知恵 (sapientia)こそがそのような認識にかかわる習態・知性的卓越性である<sup>23)</sup>。さらに、知恵によって認識される第一原理には、諸々の原理から導き出されるすべての事柄が含まれている<sup>24)</sup>。知恵によって観照される第一原理とは、普遍的な原理なのであるが、しかし、それは万物に述語づけられるところの「普遍」(universale) という意味での普遍的な原理ではない。知恵による観照の究極の対象は、本質による存在者 (ens in sua essentia)、つねに現実態において存在する万物の始原 (principium) としての神なのである<sup>25)</sup>。そして、その限りにおいては、哲学の探求の過程は、第一原理・始原としての神の観照において最高の段階に到達する、とすることができる。知恵による神の観照において、知性はこの世界の究極の根拠を知性認識することになるからである。

しかしそれにもかかわらず、アルベルトゥスは、哲学における観照的幸福の実現のためには、知恵の働きだけでは不十分であることを強調する。哲学的観照が実現され、完全なものとなるためには、知恵以外の知性的卓越性、すなわち学知 (scientia) の働きが必要とされる、というのがアルベルトゥスの立場なのである。

なるほど、知恵の働きによる神の観照は、現世における最高の幸福であり、知恵すなわち第一原理としての神の観照によって、すべての知られうる事柄 (scibilia) を認識するための根拠が獲得される。知恵は、すべての学知に確実性 (firmitas) を与えるものであり、原理から導き出される事柄のために原理を準備することによって (per dispositionem principiorum ad ea quae sequuntur ex ipsis) すべての学知を根拠づけるのである。それゆえ、アルベルトゥスによれば、哲学的観照は、観照という働きを導出するもの (elicitive) としての知恵の働きにおいてもっぱら存している、と言われるのである<sup>26)</sup>。

のみならず、アルベルトゥスは、知恵による第一原理たる神の観照のためには、それを支えるもの (adminiculans) としての学知の働きもまた必要とされることに注意をむける。人間の知性は、可感的なものから出発し、分析・推論によって可知的なものへと進んでゆかねばならない。アルベルトゥスによれば、様々な学知の働きに助けられてはじめて、知性は第一原理の知性認識に到達しうるのである<sup>27)</sup>。

しかし、観照における学知の役割はそれだけではない。

知恵における第一原理の知性認識においては、他のすべての知られうる事柄は、いわば可能的に知られているにすぎない。アルベルトゥスによれば、普遍的な原理が個別的な事柄に適用され、個別的な結論へと展開 (deducere) されることによって、哲学的観照はより充実したものとなる。この意味でも、哲学的観照は個別的な学知の働きによって完成されたものとなるのである。それゆえ、アルベルトゥスによれば、哲学的観照は完成的 (completive) には諸々の学知の働きにおいても存しているのである<sup>28)</sup>。

アルベルトゥスは、このような哲学的観照の完成について次のように述べている。

諸々の学知の対象は、それを観照することに最高の幸福が存しているところの究極のものへと秩序づけられているのであり、神以外のものの観照は神の観照へと秩序づけられねばならないのであるが、そのことを理解したときにはじめて、人間の知性の働きは最高の幸福 (felicitas) に到達するのである。そして、知性の働きがこのような仕方、自然本性に即しての自らの最善の状態に到達したとき、自然は知性に対して輝きに満ちたものとなる (natura superfloret intellectui) ののである<sup>29)</sup>。

すなわち、諸々の学知の働きが、知恵によって認識された第一原理によって根拠づけられ、第一原理の光のもとで様々な学知の働きによって様々な知られうる事柄が知

性認識されたときに、世界は知性にとって可知的なものとなる。そしてそのとき、現世における最高の幸福、哲学的観照という幸福が実現されるのである。

哲学的観照が実現されるためには、知恵だけではなく、様々な学知もまた必要とされる、というのがアルベルトゥスの強調するところだったのである<sup>30)</sup>。

## む す び

以上述べてきたように、アルベルトゥスによれば、哲学的観照とは、人間の本性の完成であり、現世において可能な限り神的なものに与ろうとする人間知性の営みであった。しかも、アルベルトゥスにとって、哲学的観照は、神的な事柄の観照にのみとどまるものではなかった。むしろ、アルベルトゥスにおいては、哲学的観照は、様々な学知、すなわち、この世界に関する様々な認識によって、より豊かな内容を獲得するものとして理解されていたのである。

ところで、本小論でとりあげた『倫理学注解と諸問題』は、アルベルトゥスが、一連のアリストテレス注解に着手した時期に行われた講義の記録であると推定されている。もしそうであるならば、この『倫理学注解と諸問題』にみえる哲学的観照に関するアルベルトゥスの見解は、彼がアリストテレス注解を進めてゆくにあたっての、ある種のマニフェストとして読むことができるのではないだろうか。すなわち、神の御業についての様々な認識が、神の哲学的観照をより豊かなものとする、というのがアルベルトゥスの確信するところであったのではないだろうか。しかし、この問題に関する考察は今後の課題としなければならない。

## 注

- 1) テキストは *Alberti Magni Opera Omnia, tomus XV, pars 2, Super Ethica commentum et quaestiones*, 1987 Münster を用いる。
- 2) *Super Ethica, X*, lect. 11, q. 5, ad 3; p. 753.
- 3) *Ibid.*, lect. 16, q. 3, ad 3; p. 773.
- 4) *Ibid.*, lect. 11, q. 7, ad 1; p. 754. アルベルトゥスの学問論における情動的知性 (*intellectus affectivus*) の意義に関しては次の文献を参照。W. Senner, "Zur Wissenschaftstheorie der Theologie im Sentenzenkommentar Alberts des Großen", in: *Albertus Magnus Doctor Universalis 1280/1980*, pp. 323-343. また、アルベルトゥスの知性論に関しては以下の文献を参照。A. J. Backes, "Der Geist als höherer Teil



- der Seele nach Albert dem Großen”, in: *Studia Albertina: Festschrift für Bernhard Geyer zum 70. Geburtstag*, Münster 1952 (Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters, Supplementband 4), pp. 52-67. I. Craemer-Ruegenberg, “Die Seele als Form in einer Hierarchie von Formen. Beobachtung zu einem Lehrstück aus der De anima-Paraphrase Alberts des Großen”, in: *Albertus Magnus* cf. 注 4). *Doctor universalis 1280/1980*, pp. 59-88. Ders., “Alberts Seelen- und Intellektlehre”, in: *Albert der Großen: seine Zeit, sein Werk, seine Wirkung*, ed. A. Zimmermann, Berlin 1981 (Miscellanea Mediaevalia, Band 14), pp. 104-115.
- 5) *Super Ethica*, X, lect. 13, q. 1, ad 5; p. 759.
  - 6) *Ibid.*, lect. 15, q. 3, solutio; p. 769. もちろん、神・知性体・人間における知性的な働きがアナログ的であるように、神・知性体・人間における「幸福」もまた同名同義ではなくアナログ的に語られるにすぎない。( *Super Ethica*, X, lect. 15, q. 3, ad 6 et 7; p. 768.)
  - 7) *Super Ethica*, X, lect. 15, q. 3, ad 6, 7; p. 768.
  - 8) *Ibid.*, lect. 16, q. 5, solutio; p. 774.
  - 9) *Ibid.*, lect. 10, q. 1, ad 3; pp. 743-744.
  - 10) *Ibid.*, lect. 12, q. 2, ad 4; p. 757. *Ibid.*, lect. 12, q. 3, ad 2; p. 757.
  - 11) *Ibid.*, lect. 11, q. 2, solutio; p. 749. *Ibid.*, lect. 16, q. 5, solutio; p. 774. *Super Ethica*, VI, lect. 8, q. 5, solutio; p. 452.
  - 12) *Super Ethica*, X, lect. 11, q. 4, ad 4; p. 752.
  - 13) *Ibid.*, lect. 11, q. 2, ad 2; p. 749.
  - 14) *Ibid.*, lect. 16, q. 6, solutio; pp. 774-775.
  - 15) *Ibid.*, lect. 11, q. 4, contra 4 et ad 1; p. 752.
  - 16) *Ibid.*, lect. 13, q. 1, ad 4; p. 759. *Ibid.*, lect. 16, q. 6, ad ob.; p. 775.
  - 17) *Ibid.*, lect. 16, q. 6, solutio; pp. 774-775. アルベルトゥスによれば、ディオニシオス・アレオパギテースが述べているように、神学的観照において、人間の靈魂は、知性体の光によって浄化され、照明され、完成されていなければならない。哲学的観照の場合も同様に、知性体の光の働きを受けることが必要とされる。しかし、哲学的観照の場合、靈魂は自然本性的な仕方で (naturaliter) 知性体の光の働きを受け取る。知性体の光は、靈魂の自然本性の性能の均整と、修練によってもたらされた完全性に即して (secundum proportionem habilitatis naturae et perfectionem, quae advenit ex studio) その働きを及ぼすからである。すなわち、知性体は、身体という質料的条件によって曇らされたものである靈魂の知性的本性を完成するものとして、靈魂に働きを及ぼすのであり、靈魂はあらかじめ修練によって知性体の光を受容しうるものへと形成されていなければならないのである。これに対して、神学的観照においては、知性体の光は、功德と恩寵に比例した仕方 (secundum proportionem meriti et gratiae)

その働きを及ぼす。神学的観照においては知性体の光は神の恩寵の一環として働くのである。( *Super Ethica*, X, lect. 13, q. 1, ad 4; p. 759.) ここでいわれる「知性体の光」とは知性体による照明にほかならない。しかし、アルベルトゥスは『倫理学注解と諸問題』においては「照明」(illuminatio) という言葉は用いていない。アルベルトゥスにおける照明に関しては以下の文献を参照。L. A. Kennedy, “St. Albert the Great’s Doctrine of Divine Illumination”, in: *Modern Schoolman*, XL, 1962, pp. 23-37. Ders., “The Nature of the Human Intellect according to St. Albert the Great”, in: *Modern Schoolman*, XXXVII, 1960, pp. 121-137.

18) *Super Ethica*, X, lect. 16, q. 6, solutio; pp. 774-775.

19) *Ibid.*, lect. 16, q. 6, solutio; pp. 774-775.

20) *Ibid.*, lect. 11, q. 2, ad 2; p. 749.

21) *Ibid.*, lect. 11, q. 5, ad 11; p. 753.

22) *Ibid.*, lect. 16, q. 5, ad 1; p. 774.

23) *Ibid.*, lect. 11, q. 5, ad 5; p. 753.

24) *Ibid.*, lect. 11, q. 1, ad 2; p. 748.

25) *Ibid.*, lect. 11, q. 1, ad 4; p. 748.

26) *Ibid.*, lect. 11, q. 1, solutio; p. 748.

27) *Ibid.*, lect. 11, q. 1, ad 1; p. 748.

28) *Ibid.*, lect. 11, q. 1, solutio; p. 748.

29) *Ibid.*, lect. 16, q. 5, solutio; p. 774.

30) Cf. *Alberti Magni Opera Omnia, tomus XV, pars 1, Super Ethica commentum et quaestiones*, 1968 Münster, prolegomena, p. VI.